

「どこからも救いの手がさしのべられない」沖縄を生きること —沖縄で難民となることを余儀なくされた朝鮮人をめぐって— Living in Okinawa “without legal protection”: As a stateless Korean in Okinawa

君島 朋幸

KIMISHIMA TOMOYUKI

沖縄大学地域研究所特別研究員

Okinawa University, the Institute of Regional Study, Special Research Fellow

キーワード

非琉球人 朝鮮人 沖縄文学 「従軍慰安婦」 難民

Keywords

Non-Ryukyuan; Korean; Okinawa Literature; “Comfort women”; Displaced persons

Quadrante, No.21 (2019), pp.81-86.

目次

1. ワークショップを終えて
 2. 「非琉球人」という視座から文学と歴史とを結びつける
 - 2-1. 又吉栄喜『ギンネム屋敷』とその周辺をめぐって
 - 2-2. 作品のその後と歴史とを結びつける
- おわりに

1. ワークショップを終えて

ワークショップ「在沖奄美の人びとの歴史——「非琉球人」管理体制の視点から」(2018年3月29日、主催：東京外国語大学海外事情研究所、基盤研究(A)「批判的地域主義に向けた地域研究のダイアレクティブ」、場所：琉球大学)において行われた、1949～54年の米軍占領下沖縄における「非琉球人」管理体制といった出入域管理令成立過程等の法的主体生産の展開とそこに生きた人々の歴史をめぐって、「非琉球人」経験者である内山照雄さんのお話や、土井智義氏の研究報告、藤本秀平氏と佐久本佳奈氏のコメント、そして自身の研究に引きつけ問いを深めていく参加者との議論は、

沖縄をめぐりいくつもの批判的思考の契機を含んでいた。

従来の戦後沖縄研究の領野においてほとんど注目されないか、切り縮められて認識されてきたといえる「非琉球人」といった法的カテゴリーを手掛かりに¹、土井氏は、軍事占領下沖縄において現働していた米軍政の出入管理体制によって法的に生産された「非琉球人」という人々に対して実行された強制送還という実践を明らかにし、〈送還可能性の法的な生産〉等といった法的主体の心身を分節化していく力学としてこれを再検討する必要性を強調した。この報告を受けたコメントや質疑応答では、参加者から多様な論点が提出された(透明化する米軍の存在、人種主義と市民権の差配、グアンタナモ等の他の米軍基地との比較、軍政判断で行われた人身管理の意義、そもそも「非琉球人」管理は抑圧的なものだったのか、「在日朝鮮人」に対する処遇との類似や差異、戸籍制度採用の理由、軍人恩給、強制送還の男女比をめぐるジェンダーやセクシュアリティの問題、国籍が大きく変

¹ 歴史学や社会学の先行研究群に関しては、土井氏の報告に詳しい。戦後沖縄文学研究に絞って言えば、新城郁夫「故郷で客死すること——『名前よ立って歩け 中屋幸吉遺稿集』論」(新城郁夫『沖縄の傷という回路』岩波書店、2014年収録)、松田潤「非人間的なものたちの生命線 阿嘉誠

一郎『世の中や(ゆんなかや)』論」(一橋大学大学院言語社会研究科『言語社会』(9)、2014年収録)他数本において、ようやく「非琉球人」の存在に言及される程度であり、それ以外の論考ではほとんど関心にもなっていない。



動する 1950 年代といった世界史的文脈との連動、文学における「混血児」や「ハンセン病」者の表象をめぐる問題など)。今後は、第二次世界大戦以降から 1972 年まで継続した軍事占領下沖縄において人身をどのような分類に沿って管理するかといった軍政目標を具体例に即して詳細に検討する作業や、戦後日本の出入国管理の根底を今なお規定する米軍覇権と連動させて論じる視点、そして国民—国家 (nation-state) や「植民地国家 (colonial-state)」、「難民」といった国家の主権的暴力等の問題を、「沖縄」という歴史的事象を通して抜本的に問い直していくことが求められているといえるだろう。

特に、今回のワークショップでお話された内山さんの「非琉球人」経験は、まさに軍事占領下沖縄を「他者」として生きる (生きた) ことのおかげがない歴史の実相にふれる大変貴重なものであり、現在隆盛をきわめる琉球独立論といったナショナルな主体のファンタジーや、「ナイチャー」であると自認する社会学者が正当化するダークな沖縄といったものとは全く別様の戦後沖縄のあり方を考える重要な示唆を与えてくれたように思われる。

2. 「非琉球人」という視座から文学と歴史とを結びつける

2-1. 又吉栄喜『ギンネム屋敷』とその周辺をめぐって

本稿では、この米軍占領下沖縄の「非琉球人」管理体制といった法的主体編成の磁場とその後を、戦後沖縄文学に返しつつ、ワークショップにおいて提出されていた課題を考えてみたい。それはたとえば、呉世宗が戦後沖縄における朝鮮人の存在にふれた次のような言葉とも響いている。長いが引用したい。

沖縄の朝鮮人たちについては、どれほどの人が連れてこられたかの公式的記録が残されなかったために、沖縄戦後も留まった人の把握が困難となった。加えて沖縄戦によって戸籍がほぼ焼失したことも、把握をますます難しくさせた。そういったことが沖縄の朝鮮人た

ちの身分の確認や証明を困難にした。というよりも彼／彼女たちには、法的地位がなかったと言ってもいい。元「慰安婦」であったことを日本で最初にカミングアウトした 裴奉奇^{ベボンギ}さんも、無国籍者の一人であった。また 1962 年 6 月 2 日付の韓国の『東亜日報』には、「望郷に涙する無国籍の「沖縄」僑胞現地座談会」という記事が掲載されている。その座談会にも、駐日韓国大使と三人の「無国籍」の「沖縄」の「韓国人」が出席している。最年長の 韓昌玉^{ハンチャンオク}さんは、沖縄戦の際にサイパンから沖縄へ召喚されたこと、戦後も沖縄に留まり子ももうけたが、戸籍、国籍がないために親子ともに就職が困難であること、また身分不明のため帰国も帰化もできないことなどを訴えている。こういった事実や関連した他の記事を読むと、「在琉」あるいは「在沖」朝鮮人とは、永住権をはじめとする法的地位の保障がなされず、無権利状態のまま、そのため生活の不安を常に抱えたまま、ただただ「沖縄」ないし「琉球」に在る者たちだったということがわかる。つまり「在琉」であれ「在沖」であれ、朝鮮人たちが「沖縄」ないし「琉球」に在るということは、無国籍状態、無権利状態に投げ出されていることと、ほぼ同義だったのである。そしてそのような無権利状態が彼／彼女らを制度的に不可視化した。

制度的に不可視化されたとはいえ、彼／彼女らは常に法の外に例外的にあったのではなく、権利的保障はなされないが、法の暴力的な執行には晒されていること、場合によっては退去を強制されうる対象であった。法の外ではなく、その中にあり、法によって常に脅かされていたのである。だとすれば彼／彼女たちは自分たちのいる場所を、そこが「沖縄」と呼ばれようが「琉球」と呼ばれようが関係なしに、どこからも救いの手がさしのべられないような、つねに極度の不安を覚えさせる場として意識していたのではなかろうか²。

² 呉世宗「「在」を生きる 沖縄の朝鮮人に触れる」(越境広場刊行委員会『越境広場』創刊 0 号、2015 年 3 月) pp.53-

54 引用、強調は引用者。

戦後沖縄に留まることを余儀なくされた元「従軍慰安婦」の裴奉奇^{ペ・ボンギ}さんや、韓昌玉^{ハンチャンオク}さんをはじめとする朝鮮人女性、そして軍夫として徴用された朝鮮人男性などの存在。本稿で問題にしたいのは、「どこからも救いの手がさしのべられないような、つねに極度の不安を覚えさせる場」であったこの沖縄を生きざるをえない人々の生が、出入域管理といった法的主体編成の残酷な分割に晒されていた、そして1972年に日本国へ施政権が返還された今もそれが継続している事実である。というのも、呉が挙げる人々は、「身分不明のため帰国も帰化もできない」という法的証明の埒外、いわば「非琉球人」ですらない「無国籍状態、無権利状態」にあった。その一方で、彼らは、戸籍・国籍制度による身分証明もできないにもかかわらず強制送還されてしまうという可能性に怯えて暮らさざるをえない恐怖と共にあったのである。しかし、この現実の具体性が、たとえば朝鮮人や「外国人」の登場する戦後沖縄の文学作品とその受容において言語化されてきたとは言い難い³。

そのためにも、軍事占領下沖縄を生きた朝鮮人とこの「非琉球人」管理体制といった現実の具体性を、又吉栄喜『ギンネム屋敷』（『すばる』1980年12月号、第4回すばる文学賞受賞作）における「江小莉」や「朝鮮人」の存在と、作品の受容などと合わせて、何が浮上し、何が忘却されているかを検討してみたい（本稿の性格や紙幅の都合上、作品が読まれてきた文脈に関心を置いているため、作品そのものの読解は先行研究を参照されたい）。梗概は以下の通り。作品内現在戦後8年を経過し

た1953年。主要な登場人物は、沖縄戦で一人息子を亡くした「私」（妻「ツル」と別居、愛人「春子」に養われ生活）、「知恵遅れ」の「ヨシコー」に売春をさせて暮らす「おじい」、スクラップ収集で生計を立てている「友吉」。彼らはある日、ギンネム屋敷に暮らす「米軍エンジニア」である「朝鮮人」がヨシコーをレイプするのを目撃したとして「朝鮮人」に慰謝料を請求する。「朝鮮人」はこれを認めるが、後で「私」を呼び出し、自身が沖縄に召喚された経緯や、元「従軍慰安婦」であった恋人「江小莉」を殺害し庭に埋めたことなどを告げる。その後「朝鮮人」は自殺し、彼の遺産が「私」に贈与される。1950年代前半の朝鮮戦争を直接的原因とする「朝鮮特需」によって資本・労働力が投下され、朝鮮半島をはじめとする東アジアへの軍事的最前線としてあった沖縄の軍事機能強化と連動した基地建設に伴う第一次出入管理令による人身の出入域管理が敷かれることで、〈送還と一体化した移入政策〉による「日本人建設労働者」移入が進められていく1953年前後の同時代的な事象として書き込まれる小莉の死と、彼女を扼殺した「朝鮮人」の自殺。

……あなた方は骨といえ、沖縄住民のか、米兵のか、日本兵のか、としか考えませんね、じゃあ、何百何千という朝鮮人は骨まで腐ってしまったのでしょうかね。……だが、考えようによっては、朝鮮人の骨は幸福かもしれません。正体がわからなくなるんですから。ちゃんと慰霊の塔、近頃つくられはじめているよう

³ 沖縄戦時に徴用・強制連行され、戦後沖縄を生きた朝鮮人に関しては、施政権が返還される1972年の第2次大戦時沖縄朝鮮人強制連行虐殺真相調査団来沖などに代表されるように、その後も重要な成果が持続的に発表されてきた。代表的なものを以下に挙げる。琉球政府編『沖縄県史第9巻各論編8 沖縄戦記録1』（琉球政府、1971年）や、沖縄県教育委員会編『沖縄県史第10巻各論編9 沖縄戦記録2』（沖縄県教育委員会、1974年）をはじめとする沖縄県内の各市町村史、山谷哲夫『沖縄のハルモニ〈大日本売春史〉』（晩聲社、1979年）、福地曠昭『哀号・朝鮮人の沖縄戦』（月刊沖縄社、1986年）、山田盟子『慰安婦たちの太平洋戦争 沖縄篇 闇に葬られた女たちの戦記』（光人社、1992年）、海野福寿・権丙卓『恨——朝鮮人軍夫の沖縄戦』（河出書房新社、1987年）。近年では、洪琬伸『沖縄戦場の記憶と「慰安所」』（インパクト出版会、2016年）、宮城晴美他『沖縄にみる性暴力と軍事主義』（御茶の水書房、2017年）、照屋大哲『沖縄県史・市町村史に収録された朝

鮮人「慰安婦」「軍夫」・「慰安所」についての証言・手記に関するデータベース」（琉球大学琉球アジア社会文化研究会編『琉球アジア社会文化研究』（19）、2016年11月）、沖本富貴子「沖縄戦に動員された朝鮮人に関する一考察」（沖縄大学地域研究所『地域研究』（20）、2017年12月）、金美恵「沖縄戦で犠牲となった朝鮮人の慰霊碑（塔）・追悼碑に関する研究ノート」（『地域研究』（20））、沖本富貴子「沖縄戦の朝鮮人：数値の検証」（『地域研究』（21）、2018年4月収録）、呉世宗『沖縄と朝鮮のはざま——朝鮮人の〈可視化／不可視化〉をめぐる歴史と語り』（明石書店、2019年）。文学作品や批評に関しても、古山高麗雄や富村順一をはじめとする多くの表現者が「慰安婦」や朝鮮人を描いてきた。しかし、米軍占領下にあった戦後沖縄における強制送還や「非琉球人」といった「外人登録」との兼ね合いから朝鮮人について言及した作品や批評の蓄積は、管見の限り充分とは言えない。

ですが、その塔に納骨してくれるんですからね。ただ、中で、朝鮮人の骨と日本兵や沖縄人の骨がけんかをしていても、将来、この塔を訪れる人達は日本兵と沖縄人の骨に花束を、黙禱を捧げるのでしょうか、永久に……。もう三カ月になります。前に言いましたか？……警察は一度も来ません。多分、被害者が朝鮮人の売春婦だからでしょう。それとも、加害者が米軍エンジニアの朝鮮人だからでしょうか？いや、どうでもいい。ただ、私は、あの穴の骨がほんとに小莉なのかと疑いだしてきたんですよ、近頃からですが……。今更掘り返してみたってどうしようもありません。月の明るい晩にはあの盛り土の上に女の姿が見える気もしますが、錯覚でしょうか、小莉とは違うようなんですよ。私はこの屋敷の亡霊たちにたたられてしまったのでしょうかね、でも亡霊は強いのにたたるといふじゃありませんか。どうして、私のような弱虫に……。小莉は、ほんとにあの骨ですよ、ね⁴。

『ギンネム屋敷』をめぐる論考を整理すると、大方、次のような論点が提示されている。岡本恵徳は、この作品を戦後沖縄においてなお継続する「日本の朝鮮人差別とそれの生み出した悲劇」といった「戦争の後遺症」としてまとめている⁵。これを踏まえ、丸川哲史は、作中で「朝鮮人」が「韓国人」ではなく朝鮮人と呼ばれることによって沖縄における「朝鮮人」差別が浮かび上がっているとも指摘している⁶。また、戦後沖縄文学の「従軍慰安婦」表象を分析する中でこの作品について言及したのは新城郁夫であったが⁷、そこでは小莉らの存在が忘却され男性間の物語の中に消費されてしまう「文学のレイプ」的状況と、また「朝鮮人」の死による「私」への遺産の流通が日米軍事同盟下における経済循環構造と帝国主義的暴力の連鎖に飲み

込まれている点が指摘されている。そして、村上陽子は、このような先行研究群や作品自体が民族的男性性を中心に語られてしまっている点と、小莉や作中の女性たちの語りが退けられているように見えながらも、それに反して女性たちの記憶が亡霊的に回帰するという二面的な側面を作品から掬い取っている⁸。

これらを踏まえて本稿で導入したい視点は、沖縄の人々、米軍属の「朝鮮人」と「ナイチャー（内地人）二世」、そして小莉らの人身を法的主体に分節する米軍政の出入域管理体制である。たとえば、丸川哲史は、先の朝鮮人差別といった「ポジション」の問題としてこの作品を読んでいるが、次のような指摘は急ぎ修正される必要がある。

冷戦体制（日本政府）は、死者を墓場まで追いかけて、そのポジションの選択を迫ったということになる〔＝「平和の^{いしじ}礎」に刻銘された朝鮮人を大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国に事後的に区分したこと、引用者補注〕。その意味でもこの「ギンネム屋敷」に出てくる男が「朝鮮人」と記されているということには、作者が戦後生まれであることから、ある歴史認識が貫徹されていることがわかる。なぜなら、当時米軍基地のエンジニアになっているのであれば、当然その男は韓国籍であるはずだからである。あえて「朝鮮人」とすることによって、戦前との連続性のなかに潜在する沖縄人の差別を顕在化させると同時に、その「朝鮮人」の自殺によって、沖縄人の加害者性が微温的かつアイロニカルに炙り出される仕組みとなっている⁹。

ここに見られる「当時米軍基地のエンジニアになっているのであれば、当然その男は韓国籍であるはず」といった国籍の設定に注意を払いたい。

⁴ 又吉栄喜『ギンネム屋敷』（集英社、1981年）pp.186-187引用。

⁵ 岡本恵徳「又吉栄喜『ギンネム屋敷』 沖縄戦のなかの朝鮮人差別」（『現代文学に見る沖縄の自画像』高文研、1996年）p.74引用。

⁶ 丸川哲史「燃える沖縄（琉球弧）」（『冷戦文化論 忘れられた曖昧な戦争の現在地』双風舎、2005年）pp.171-172を参照。

⁷ 新城郁夫「文学のレイプ 戦後沖縄文学における「従軍慰安婦」表象」（『到来する沖縄 沖縄表象批判論』インパクト出版会、2007年）を参照。

⁸ 村上陽子「亡霊は誰にたたるかー又吉栄喜『ギンネム屋敷』」（『出来事の残響 原爆文学と沖縄文学』インパクト出版会、2015年）を参照。

⁹ 丸川哲史、前掲書、pp.173-174引用、強調は引用者。

何故なら、この「朝鮮人」が「韓国籍」であることをいかに証明したのかを示す具体的な論拠を作中から読み取ることができないからだ。より穿って言えば、この当時、誰が沖縄で「韓国籍」を取得し、それを証明しえたかには常に慎重であっていいし、付言すれば、小莉のような存在をめぐる法の問題はいかに説明できるのだろうか、彼女はあくまでも忘却される対象でしかないのかどうかは繰り返し問われるべきである。この困難があるために、先で見た呉世宗が「無国籍」ゆえに「制度的に不可視化」された朝鮮人の存在に言及している点は今一度確認されたい。そもそも、1950年代前半時点の日本における「外国人登録」すなわち「韓国籍」取得や「朝鮮籍」の解釈を振り返ってみても、これが出生地を指すのか、国籍を指すのかといった名称・概念そのものが議論の対象になっていた時期である¹⁰。法の雑居状態にあった軍事占領下の沖縄においてこれが一層困難なものであったことには留意する必要があるだろう。もちろん、社会的・政治的リスクから米軍が「韓国籍」者を雇用したとみることも可能かもしれないが、米軍属であるがゆえに「韓国籍」者であるという推察によって見逃されてしまいかねないのは、「朝鮮人」の国籍に焦点化してしまうことで、第一次出入管理令（米国民政府令第93号）時点で「琉球住民」（戸籍・国籍不問）であった「朝鮮人」が、第二次出入管理令（米国民政府令第125号）によって「非琉球人」として管理されるか（戸籍一元化）、そこからこぼれ落ちていってしまう可能性があるといった出入管理をめぐる法のダイナミズムである。

2-2. 作品のその後と歴史とを結びつける

この作品への言及の中で、法的主体編成といった文脈から読むことが困難だといえる小莉に結びつけて思い出したいが、「非琉球人」管理体制とその後をめぐって、沖縄という場所を朝鮮人が「無国籍」や「外国人」として生きていることが問題視されるきっかけになったのは、「従軍慰安婦」として渡嘉敷島に動員された裴奉奇さんのカミング

アウトであった。

太平洋戦争末期に、沖縄へ『慰安婦』として連行され、終戦後は不法在留者の形でヒソソリと身を潜めるように暮らしてきた朝鮮出身の年老いた女性が、このほど那覇入国管理事務所の特別な配慮で三十年ぶりに『自由』を手にした。当時は『日本人』でも、いまは外国人。旅券もビザもないため、強制送還の対象になるところだったが『不幸な過去』が考慮され、韓国政府の了解を得たうえ、法務省はこのほど特別在留許可を与えた¹¹。

他所としての沖縄を生き、戦後は次々と仕事や住まいを変え、晩年は沖縄本島南部の佐敷で隠れるように暮らしていた^{ボンギ}奉奇さんの言葉にあるように、そもそも彼女は何故「従軍慰安婦」であったことを告白する必要があったのかを思い出したい。1972年の沖縄施政権返還を前に、それまで沖縄にいた朝鮮人の「在留許可」をめぐる法的規制が始まるなか（日韓協定による協定永住権等といった日本国の「外国人登録」の問題）、「外人登録」からも漏れ、日本語も朝鮮語も書けない彼女は日本国外へと強制送還される可能性があったが、これを免れるためにこそ「従軍慰安婦」として沖縄に連行された事実を告白し、行政による生活保護に頼らざるを得ない事態にあり、那覇入国管理事務所そして法務省が『不幸な過去』に対する「特別な配慮」として、「当時は『日本人』でも、いまは外国人」とされた彼女に「特別在留許可を与えた」というのだ。彼女のケースに関しても、1972年以前から強制送還自体は可能だったものの、法がタッチしないだけの状態にあったことを踏まえれば、「終戦後は不法在留者の形でヒソソリと身を潜めるように暮らしてきた朝鮮出身の年老いた女性」という記述が、いかに送還可能性に立脚し、彼女の心身を拘束していたかが改めて問われなければならないだろう（そもそも^{ボンギ}奉奇さんが帰りたいと望んだのは、韓国ではなく、分断が解消された郷里だ

¹⁰ 朝鮮戦争を前後する日本国内の在日朝鮮人の法的地位をめぐって、「韓国籍」といった国籍や「朝鮮籍」といった出生地を示す記号をめぐる日本国や韓国の解釈に関する議論の詳細は、鄭栄桓「在日朝鮮人の「国籍」と朝鮮戦争（1947-1952年）——「朝鮮籍」はいかにして生まれたか」

（『PRIME』(40)、2017年3月収録）を参照。

¹¹ 「戦時中、沖縄に連行の韓国女性 30年ぶり『自由』を手 不幸な過去を考慮 法務省 特別在留を許可」（『高知新聞』1975年10月22日朝刊）強調は引用者。

ったことも思い出されたい¹²⁾。

そして、『ギンネム屋敷』が発表された1980年代時点で、既にこの「非琉球人」管理体制が沖縄県内の言論において忘却されていったことをも踏まえるなら¹³⁾、小莉の死後を生きたとはいえる^{ベボンギ} 奉奇さんの「在留許可」について書かれた先の記事を現時点から読み返した時、沖縄に生きた朝鮮人という「外国人」である「他者」の歴史、あるいは沖縄で起きていた強制送還という実践に対する恐怖が「外国人」固有の情動・現象に切り縮められて認識されていったようにも思える¹⁴⁾。強調したいのは、「非琉球人」管理体制が、「不法在留」といった身分以外に沖縄を生きる方法がなく「身分不明のため帰国も帰化もできない」状態にあった人々を追放する力学として現働していた歴史と、この出入管理令自体も、対象とする人々の範囲を変更しながら沖縄施政権返還以降の主権再編後に米軍から日本国内法に鞍替えすることで、米軍-日本という国家間同盟が引き続き送還可能性という権能の元に「外国人」を管理している事実である（土井氏の研究の主眼である「本土籍者」に対して実施された強制送還を振り返るだけでも、日米が共同の間-国家的な人口管理の共犯関係にあったことは疑いようもない）。であればこそ、取り組まれるべきは、日米軍事同盟における強制送還を軸にした「非琉球人」管理体制といった、軍事占領下沖縄と現在の日本の出入国管理とを連結する歴史社会的事象を、沖縄戦後史ひいては世界史的文脈に据え直し、「どこからも救いの手がさしのべられない」場所であってしまった、そして今なおそうであるこの沖縄から、国家とは、主権とは、軍事とは、そして「国民」／「外国人」といった分割を要求する出入国管理とは何かを再考していくことにある。

おわりに

本稿では、ワークショップの内容を踏まえ、戦後沖縄文学と歴史とを新たに縫りあわせる試みとして、「非琉球人」管理体制、『ギンネム屋敷』とその受容、そして^{ベボンギ} 裴奉奇さんをめぐる記事を繋げて考察した。従来ほとんど顧みられることのなかった「非琉球人」管理体制の視点を導入するという性格上、作品と歴史とを横断したことで問題点を炙り出すことはできたが、作品や個々の事象に深く踏み込むことができなかったのは今後の課題でもある。最後にも挙げたように、「非琉球人」管理体制と日本国における出入国管理体制を、戦後沖縄文学や、飯尾憲士^{チェウルスン}『崔乙順の上申書』（初出『流動』1974年10月）といった在日朝鮮人文学作品等と比較しつつ、その差異や類似、強制送還、主権、国民-国家、難民、ジェンダーといった観点を、沖縄に閉じない文脈に置き直し、遍在する歴史的事象として分析していきたい。

¹²⁾ 川田文子『赤瓦の家 朝鮮から来た従軍慰安婦』（筑摩書房、1987年）を参照。

¹³⁾ やや時代を前後してしまうが、『新沖縄文学 〈特集〉在沖本土人が見た沖縄像——カルチャー・ギャップを探る——』（沖縄タイムス社(65)、1985年9月）などを参照。80年代時点の沖縄の文壇を確認すると、「ナイチャー」を描いた白石弥生『若夏の来訪者』（1986年、第12回新沖縄文学賞入賞）や『生年祝』（1987年、第17回九州芸術祭文学賞佳作）、仲村渠ハツ『旅人』（1983年）といった作品が発

表されているが、軍事占領下沖縄を生きたはずの県外出身者の「非琉球人」登録の問題は一切登場しないという文脈がある。

¹⁴⁾ 「外人登録」を受けた「非琉球人」が抱えた葛藤や恐怖をめぐって、土井智義「非琉球人」の登場と境界化への問い——第一次出入管理令（USCAR 布令第九三号・一九五三年一月制定）の成立をめぐって——（越境広場刊行委員会『越境広場』2号、2016年7月収録）を参照。